

書評

脳科学のテーブル

外山敬介, 甘利俊一, 篠本 滋 編

評者 池谷裕二 東京大学教授

のっけから個人的な話で恐縮だが、私が脳科学に携わってから(学生時代も含めると)ほぼ15年になる。15年前といえば私の研究分野では、CaMK IIノックアウトマウスが作製されたり、低頻度刺激による海馬長期抑圧が発見されたり、樹状突起からパッチクランプ記録が行われ始めたりと、だいたいそんな時期である。つまり、それ以降の研究進展については、私はリアルタイムでフォローしているが、それ以前の研究については、主に「教科書」を通じてレトロスペクティブに学習したものであるということになる。

『脳科学のテーブル』を読んだ。どんな教科書よりもワクワク、そしてドキドキした。乾燥した荒野に水が注がれるような快感。頭の中にあった無機質な知識として脳の理解や学説が、どんな歴史的経緯で生まれ、どんなふうに移り変わり、どう変容してきたのか、活き活きとしたイメージへと変換されていく。

同書の構成は、篠本滋先生の用語解説を挟んで、大きく前半と後半に分けられる。両者とも「対談」という形をとっている。前半は心理学から形態学や生理学までの多様な分野の先生方が集う。後半はおもに計算論的神経科学の先生方だ。ともにアクセル全開でシビれる話題が続く。

前半を終始リードするのは外山敬介先生である。脳科学のことなら何にでも精通している「生き字引」ということはよく知っていたが、ここまで貴重な経験をされている方とは正直認識していなかった。すべてのページにマーカを引きたくくなるような珠玉のトピックが飛び出す。なかでもエクスルが「クイック・ジョン」と呼ばれていたことには驚いた。1週間に1報ずつ論文を発表するというハイペースだ。いずれにせよ、わずか100ページ弱で前電気生理学からBMI、チャネルロドプシンに至る100年以上の歴史が一気に概観される様はそれだけでも読む価値があ

る。

後半は甘利俊一先生を中心に話題が巡る。マッカラック・ピッツやパーセプトロンといった古典的なテーマに始まり、バックプロパゲーションやホップフィールドを経て、自己組織化マップ、SVMへと、興味の尽きないトピックが溢れる。何十年も前から「実験と理論の融合」が謳われていたということに唸らされたが、個人的には甘利先生の四方山話が最高に面白かった。

結局、サイエンスも人間の営みによって生まれているということ。そんな人間臭さを楽しく実感できる。同書はそうした稀有な書物だと思った。もちろんラボのメンバーにもあまねく薦めている。

●四六判 頁199 2008年
定価1,890円(税込)
京都大学学術出版会刊